令和５年度　学校評価自己評価書（豊山町立志水小学校）

資料1

経営理念	
	学校教育目標　…　力いっぱいがんばる子の育成
	めざす児童像　…　進んで学ぶ子　仲よく助け合う子　元気でたくましい子
	めざす教職員像　…　子どもを大切にする教職員　学び続ける教職員　協働する教職員

【評価基準】４…十分達成できた、３…ほぼ達成できた、２…あまり達成できなかった、１…全く達成できなかった

経営目標	重点目標	班	担当	具体的な取組	評価項目	項目別評価	達成状況	改善に向けて
○進んで学ぶ子（確かな学力）の育成	・学習習慣の確立と基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得 ・自己教育力を培う役割を担う学校図書館の活用	1	日比野 伊藤実 後藤 小川	①　授業の導入で前時の振り返りをしたり、練習プリントを活用したりして、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図る。 ②　ばっちりメニューやわくわくメニューの取り組みを通して、自分に合った家庭での学習習慣を身に付けさせる。 ③　基礎学力の定着を図るための漢字・計算コンクールを実施し、児童の自己学習力を高め、個に応じた指導に生かす。 ④　朝の読書や読書週間を設け、たくさんの本や多様な分野の本に親しむ機会を増やす。 ⑤　調べ学習等で、図書室や学習室の図書を活用した指導を行う。 ⑥　授業に関連した本を教室に置き、児童の自己教育力を培う。	①　授業の導入で前時の振り返りをしたり、練習プリントを活用したりして、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図ったか。 ②　ばっちりメニューやわくわくメニューの取り組みを通して、自分に合った家庭での学習習慣を身に付けさせることができたか。 ③　基礎学力の定着を図るための漢字・計算コンクールを実施し、その結果を基にして、個に応じた指導に生かすことができたか。 ④　朝の読書や読書週間を通して、たくさんの本や多様な分野の本を親しむように指導したか。 ⑤　調べ学習等で、図書室や学習室を活用した指導をしたか。 ⑥　授業に関連した本を教室に置き、児童が本に興味をもつ機会を増やすことができたか。	児童 ①３．４ ②３．４ ③３．５ ④３．２ ⑤３．０ ⑥２．９ 保護者 ①③３．１ ②２．８ 教職員 ①３．１ ②２．８ ③２．８ ④３．０ ⑤２．８ ⑥２．６	①おおむね基礎的・基本的な知識・技能の習得ができている。 【参考数値】 ・２学期漢字コンクール賞受賞者　金40%　銀17%　銅21% ・２学期計算コンクール賞受賞者　金33%　銀13%　銅16% （金賞96点以上、銀賞90点以上、銅賞80点以上） ②家庭学習に対する保護者の評価があまりよくなかった。 ③多くの児童が漢字・計算コンクールにむけて、意欲的に取り組んでいることが分かった。漢字コンクールに関しては、１学期に２回実施することで知識が定着して、賞受賞者が増えたと考えられる。 ④図書に関するアンケートに多くの児童が「とてもできた」「まあまあできた」と答えた。読書ビンゴの達成率が高く、児童が意欲的に活動することができた。 【参考数値】 ・読書ビンゴを達成した児童の割合　51% ・授業で図書室を利用した回数（４～１月）　各学級平均９回	①反復練習の量を増やせるような取組を考えていく。 ②引き続き「ばっちりメニュー」や「わくわくメニュー」の取り組みの様子を保護者にホームページで定期的に知らせていきたい。 ④学級での図書室利用回数はそれほど多くなかったので、学級活動や国語の調べ学習での活用を促していきたい。 ⑤図書フォルダにある「授業に関する本の一覧表」を各学担任に配付して、活用できるようにしたい。
	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ※「聴き合い、学び合う」活動 ※「つなぐ」「もどす」ことで対話をつくる教師の役割 ※自己選択・自己決定や学びを自覚する振り返り ・体験的な活動の充実を支えにした深まりのある授業展開	2	藤井 長谷川 鷲澤	①　「分からないから教えて」と言える学級作りを基盤に、考えを聴き合い、学び合う場の設定をする。 ②　児童の小さな気付きや発言等を学級全体につないだり、児童の発言をもとに学級全体に問い返したりするなど、対話をつくり思考を深めるための教師の指導言を工夫する。 ③　主体的な学びをつくるために、小さな事でも自己選択・自己決定する場を設ける。 ④　主体的な学びになるように、振り返る内容の充実を図る。 ⑤　動画やインターネットで学ぶだけでなく、具体物に触れたり、施設を見学したりする体験的な活動を取り入れ、深い学びになるよう指導法を工夫する。	①　分からないことを聴いたり、考えを伝え合ったりする場を設定することができたか。 ②　児童の気付きや発言等をクラス全体につないだり、前時までの学習をつないだりする授業を行うことができたか。 ③　自己選択・自己決定や振り返りをする場面を指導過程に設定することができたか。 ④　体験的な活動を指導過程に設定することができたか。	児童 ①３．４ ③④３．４ ⑤３．６ 教職員 ①３．２ ②３．３ ③２．３ ④３．０ ⑤３．２	児童アンケートから、どの項目も高い数値が出ており、概ね目標は達成できている。 教職員アンケート③の自己選択する場面の設定が低い数値となっているのは、自己選択を難しく捉えられているのではないかと考えられる。 【体験的活動】 ２年（町探検、社教センター見学、給食センター見学） ３年（東部消防署見学、愛知県警見学）	③「１人で考える・みんなで考える」「どの高さの鉄棒に挑戦する・どの技に挑戦する」「どの問題から考える」など、児童が自己選択を繰り返し行う学習場面を設定し、主体的な学びにつなげていく。また、児童自身に分からないことを明確にさせ、「分からないから教えて」と自ら問いかけられるように支援することで深い学びにつなげていく。これらのことを共通理解を図っていきたい。
○仲よく助け合う子（豊かな心）の育成	・多面的・多角的に考えて議論する道徳科の充実	3	福重 齋藤	①　ねらいとする道徳的価値について教材研究を以下の視点で行う。 ・ねらいとする道徳的価値をさまざまな面から捉える ・ねらいとする道徳的価値を支えるさまざまな根拠を考える ・さまざまな登場人物の立場で考える ・人間の強さや弱さを捉えて考える ②　自分の体験や感じ方、考え方を言語化するためのワークシートや役割演技等を工夫する。 ③　さまざまな見方やさまざまな角度からの考えを交流し、話し合いを深める学習活動を行わせる。 ④　自己を見つめ、これからの生き方に生かしていくことを見通せる場を設ける。	①　ねらいとする道徳的価値についてさまざまな面や根拠、登場人物の立場、人間の強さや弱さを考えさせることのできる教材研究を行ったか。 ②　自分の体験や感じ方、考え方を言語化するためのワークシートや役割演技等を工夫したか。 ③　さまざまな見方やさまざまな角度からの考えを交流し、話し合いを深める学習活動を行わせたか。 ④　自己を見つめ、道徳での学びを「自分事」として考え、これからの生き方に生かしていくことを見通せる場を設けたか。	児童 ②３．３ ③３．４ ④３．４ 教職員 ①２．６ ②２．８ ③３．０ ④３．２	①教職員評価が、他教科に比べ教材研究に充てる時間が少ないことから低評価になったのではないかと考える。 ②教職員評価は、自分の体験や感じ方、考え方を言語化させる場面はつくっているものの、ワークシートは付録のものをそのまま活用していることや、役割演技を取り入れる頻度にひっかかりが見られたのではないかと考えられる。 ③児童の評価が高く、話し合いにより児童の学びは深まっていると考えている。 ④児童、教職員ともに評価が高く、授業を通してこれからの生活に生かそうとする姿が増えていることが分かった。	①学年間で話し合ったり、次年度に引き継いだりすることで、教材研究の成果を共有していく。 ②ワークシートや役割演技を取り入れる活動について、授業で扱う手立てを整理し、教材と学年に合った方法を明確にしていくとよいのではないかと考える。
	・共感的な関係作り、自己の可能性の追求、思いやりと自己有用感を育む活動の実施 ※児童会活動や縦割り班活動の充実※自他の存在 を大切にする取組	4	角 玉山 松原	①　企画運営委員会と生活委員会を中心に、異学年交流の全体集会を企画・運営し、縦のつながりが深まる活動を工夫する。 ②　縦割り班を編成し、清掃や集会、読み聞かせ等の活動を行い、高学年に役割をもたせる。 ③　縦割り清掃の反省会では、掃除を通して互いを認め合う活動を取り入れる。 ④　昼の放送で全校放送するなど誕生日を祝う活動を行い、自他の存在を大切にする。 ⑤　縦割り班の６年生に対する感謝の気持ちをメッセージカードに書き、６年生にプレゼントする。 ⑥　１年生と６年生とのペア活動など、異学年での交流を行う。	①⑥　集会や行事、縦割り班活動等を通して、異学年との心のつながりをもたせられたか。 ②③　集会や行事、縦割り班活動等を通して、児童の自己有用感を高めることができたか。 ⑤　日常生活や縦割り班活動を通して、思いやりや感謝の心を育むことができたか。	児童 ①⑤３．４ ③1～2年 ３．１ ③3～6年 ３．１ ②③1～2年 ３．６ ②③3～6年 ３．１ 教職員 ①⑥３．１ ②③２．９ ③３．０	②③の質問において、教師の評価が低くなっている。教師主体ではなく、児童主体で行っている活動が多く、教師が児童に自己有用感をもたせることができていないと感じたのではないかと感じる。児童の評価は、１～２年生に比べ３～６年生の評価が０．５低くなっている。 縦割り班が通年になったことで、他学年との関りが深まった。 【参考数値】 ・縦割り清掃実施状況　週２回 ・縦割り班を活用した取り組み お楽しみ集会（７月・１２月）、縦割り班遊び（年３回）、縦割り班なわとび（年３回）　など ・異学年交流を行った授業 ソーラン節（５・６年） なわとび運動（１・６年、１・４年） 生活科（１・２年）	縦割り班掃除の反省会でも同じ人が話す人が多いので挨拶からできるように、班長指導をしていく。 縦割り班を活用した活動実施にあたり、事前に５～６年生による打合せを行い、高学年がめあてをもち、協力して活動に取り組めるように支援していく。 わくわくタイムで行われたことを縦割り班でも行っていくと関係作りが深まる。
	・気持ちのよいあいさつ、返事の励行 ・児童の心に寄り添った多様な教育相談活動の実施	5	舘野 藤井 伏見	①『あいさつビンゴ』を学期に３回行い、挨拶への意欲を高める。 ②『あいさつビンゴ家庭版』を学期に１回行い、学校外での挨拶を意識させ、家庭・地域での挨拶への意欲を高める。 ③ 学校外で保護者や地域の方にも挨拶ができるよう、学級・学年で継続的に指導をする。 ④ 教職員は１人でも多くの児童の名前と顔を一致させ、児童の安心感を高めるとともに、いじめなどの問題が児童から訴えやすい環境を学校全体で作る。 ⑤ いじめに関するアンケートや教育相談、チャンス面談の実施やあのねボックスを設置する。児童の不安感や困り感を教職員が把握し、いじめや不登校を未然に防止するために活用していく。 ⑥ 担任は、１日の生活の中でクラスの児童全員と言葉のやり取りをする。担任以外は、あいさつ等を通して児童とのコミュニケーションを図る。 ⑦ 保護者との連絡を密にし、家庭と学校の共通理解に努める。また、家庭と連絡を取った内容は学校や学年で情報を共有する。 ⑧ 毎朝「心の天気」を入力させ、自身の心の健康を意識させるとともに、児童の様子を把握する一助とする。	①②③　児童は、進んで挨拶・会釈をすることができたか。 ⑤⑦　児童や保護者が安心できる環境を作ることができたか。 ④⑥⑧　毎日、児童とコミュニケーションを取ることができたか。	児童 ①②③ ３．４ ①②３．６ ④⑤⑥ ３．４ 保護者 ①②③ ３．０ ④⑤⑥⑦ ３．２ 職職員 ①②③ ３．３ ④３．４ ⑤３．４ ⑥３．６ ⑦３．６ ⑧２．１	○あいさつについて あいさつビンゴで８列ビンゴを達成した児童の割合は、２月に実施した活動で約７６%と高い割合の児童が意欲的に取り組む結果が見られた。児童の自己評価を見ても概ねよい結果になっている。ただ、保護者の結果との開きが多少あり、家庭や地域であまりあいさつができていないようである。 今年度は、家庭や地域でもあいさつが増やせるように、元気アップカードと少し時期をずらして、あいさつビンゴ家庭版を行い、保護者と児童が互いにあいさつを意識できるような取り組みを行った。家庭版のビンゴ結果から、児童はあいさつビンゴ家庭版へ意欲的により組んでいる様子が感じられたが、保護者の評価にはつながらなかった。 ○心の天気について ⑧心の天気を活用している学級がかなり少なかった。児童に毎日取り組むよう指示した学級は５学級、時間があるときに取り組んでいる学級が３学級、全く取り組めていない学級が６学級という結果であった。取り組めていない理由としては、「時間が取れない」「低学年だとタブレットの操作に時間がかかるという先入観があった」などがあがった。 ただ、⑥の項目では、例年に比べ評価がかなり高かった。「心の天気」への取り組みは低い数値ではあったが、直接的なコミュニケーションは取れていたということがこの結果から分かった。 【参考数値】 ・あいさつビンゴの取り組み ８列全てビンゴした児童の人数　２月実施220名　76% ・心の天気の取り組み 毎日取り組んだ児童　97名　34%	○あいさつについて ビンゴを実施しているときはできていてたが、日常のあいさつの習慣化には、つながらなかったのかもしれない。今後あいさつを促進していく活動では、一過性な取組となってしまわないように工夫して実施していく必要がある。 ○心の天気について 教員発信で全ての児童と直接コミュニケーションを取ることが大事ではあるが、時間に追われる中でツールによる児童発信から、間接的にでも児童の心の様子が把握できることはとても便利である。取り組めていない学級の担任に、この利点を周知し、学年に応じて取り組めるようにしていきたい。ただ、直接的なコミュニケーションを取ったかの項目では例年に比べ評価がかなり高かったことから、直接コミュニケーションと「心の天気」をうまく活用しながら、児童とコミュニケーションを図っていけるようにしていきたい。
○元気でたくましい子（健やかな体）	・いじめ・不登校の未然防止と早期発見・早期対応							

【評価基準】４…十分達成できた、３…ほぼ達成できた、２…あまり達成できなかった、１…全く達成できなかった

経営目標	重点目標	班	担当	具体的な取組	評価項目	項目別評価	達成状況	改善に向けて
○元気でたくましい子（健やかな体）	・健康な生活習慣づくりと食育の推進 ※ミニメディアデーの実施 ・体育的な行事・活動と遊びの充実	6	宮外 伊藤実 伏見	①　健康な生活習慣の育成のため、年３回元気アップカードを実施する（ミニメディアデー含む）。 ②　学校保健委員会において、デジタル機器利用の危険性と依存について、児童と保護者を対象に講師を招いて講演を行う。 ③　ランニングカードを活用して、志水っ子ランニングや休み時間、体育の授業を行い、運動 習慣の定着を図る。 ④　なわとび運動を実施する。また、なわとびカードを活用し、身体能力の向上を図る。 ⑤　運動会を企画し、心身の健全な発達や健康の保持増進などについての関心を高め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行う。 ⑥　親子給食において、栄養教諭よりバランスのよい食事について、児童と保護者を対象に話をしていただく。 ⑦　食育指導を通して、バランスのよい食習慣の定着を図る。	①　元気アップカードを活用し、健康な生活習慣を意識して過ごす児童が増加したか。 ②　学校保健委員会での講演を通して、デジタル機器利用の危険性を理解させることができたか。 ③　ランニングがんばりカードを通して、進んで運動に親しむことができたか。全校児童がラ ンニングカード１枚目を走破できたか。 ④　自分で決めたなわとびカードの目標を達成することができたか。 ⑤　学級や学年、全校児童で協力して、規律のある行動をしたり、積極的に運動に親しんだりすることができたか。 ⑥　親子給食や食育指導をとおして、バランスよく食事をとることができたか。	児童 ①３．４ ②３．５ ⑤３．７ ⑦1～2年 ３．４ ⑦3～6年 ３．３ 保護者 ①２．９ ②３．０ ⑤３．８ ⑦1～2年 ３．０ ⑦3～6年 ３．１ 教職員 ①３．３ ⑤３．３ ⑦３．２	①児童と保護者のアンケートの結果に差があった。年に３回実施している元気アップカードからも、朝食の摂取率は９０％以上であるが、自分で決めた就寝時刻（全校平均２１：４６）を守ることができる児童は約４５％、朝と夜の歯磨きの実施率は平均７３％であり、課題も見つかった。 ②児童に比べて保護者のアンケート結果では、「まあまあできた」という回答が多かった。 ⑥親子給食を通して、野菜をおいしく食べる方法や、栄養のバランスを考えて食べる大切さを知り、児童も保護者も意識するようになった。 ⑦児童のアンケート結果では「とても」の回答が多く、保護者のアンケートでは「まあまあできた」の回答が多かった。	①各学級で健康な生活習慣の重要性を考えさせ担任からこまめに声かけをしたり、取組時期により内容項目を 絞って実施するなどして、児童が目的意識をもって元気アップカードに取り組むことができるようしていく。 ②デジタル機器の利用時間の制限は、児童だけではコントロールすることは難しいため、保護者への継続的な働きかけが必要。 ⑥保護者の中には、給食のメニューや調理方法についての問い合わせもあった。参加者だけでなく、学校全体での意識を高めるために、給食だよりなどで調理方法を伝えるなど要望する。２年生が給食センターに見学する機会を設ける。 ⑦学校は給食の指導はできるが、家庭での様子は保護者任せになってしまうので、保護者への働きかけが必要である。
○開かれた信頼される学校づくり	・地域のボランティア、ゲストティチャーの活用 ・家庭や地域と教育目標を共有し、学校改善を進めるための学校評価の実施 ・学校公開の充実とホームページ、学年だより等を活用した情報発信	7	教頭 小林	①　教科の学習内容に沿った出前講座、地域や家庭のボランティアの活用等の計画を立てる。 ②　事前打合せを行い、本時のねらいを明確にするとともに、事後の評価をし次年度への記録を残す。 ③　前年度実施アンケートの意見を生かすとともに、学校教育目標・重点目標に基づき、具体的な取組を計画的に行う。 ④　自己評価書を公開し、学校評議員会・学校関係者評価委員会での意見を反映して評価結果をまとめる。次年度に向けた改善方策を全教職員で具体的に検討する機会を設ける。 ⑤　地域や保護者の方が学校を訪れる機会を状況に応じて設け、授業の様子を公開する。 ⑥　学年便りや保健便りを月１回、必要に応じてその他の便り等を発行し、学校の取組について情報発信をする。ホームページを随時更新し、児童の様子を知らせる。	①　地域や外部ボランティア、ゲストティーチャーを活用することにより、学校生活の充実が図れたか。 ②　本時のねらいを明確にするとともに、事後評価し次年度に向けて記録を残したか。 ③　学校評価の取組を計画的に行い、学校教育目標・重点目標に基づいた「具体的な取組」について実践することができたか。 ④　全職員で具体的に検討して、自己評価書をまとめることができたか。 ⑤　地域や保護者の方に、学校公開を行うことができたか。 ⑥　ホームページや便りを活用し、学校の取組や児童の様子を知らせることができたか。	保護者 ④１．９ ⑤⑥３．２ 教職員 ①３．２ ②２．８ ③３．０ ④２．９ ⑤⑥３．３	今年度は、外部講師を招いての出前講座を実施することで、学習内容の充実につながった。 【出前講座】 ２年（山村氏による読み聞かせ）、３年（自転車教室・人権教室・読み聞かせ・リコーダー指導）４年（福祉実践教室・山村氏による読み聞かせ）、５・６年（保護者による仕事の話）、６年（福祉実践教室・租税教室・薬物乱用防止教室・戦争体験伝承会、北部市場出前講座）、全学年（読み聞かせ･どんぐり読書会、情報モラル教室（リモート教室を含む））、クラブ活動（琴教室） 各種便りや学校新聞、ホームページ等を通して、子どもの様子や学校の取組を発信することができた。 重点目標や具体的な取組を意識して教育活動に取り組んでいると回答した職員は昨年度より増えている。 運動会、作品展・学校公開を実施し、保護者に学校の様子を直に見ていただくことができた。 【参考】学年だより　年１３回発行 保健だより　年１３回発行 校長室だより年１０回発行 ホームページ記事数　２５６件（２月１４日現在）	「出前講座一覧表」に、次年度に向けての評価を記録し引き継いでいきたい。 ＰＴＡ総会・学級懇談会では時間を十分に取れず、保護者に本校の教育目標及び重点目標を直接伝えることが難しいため、学年だより「にこにこ　わくわく　志水っ子」コーナーで子どもの学ぶ姿を紹介してきた。保護者に理解が得られるようにより充実していきたい。 来年度も、班別会議日を設け、取組内容の見直しを図るなど、教育活動をより充実したものとしていきたい。 学級経営案を作成するにあたり、重点目標に基づいた「具体的な取組」について意見交流を図る。更に、学期ごとに学級経営について振り返り、次学期に向けての方針・改善点を考える。
○教職員の資質向上	・教材と向き合い、子どもと向き合った授業の構想 ・ＯＪＴによる効果的・効率的な研修 ・現職研修の充実と授業力向上を目指した教員同士の授業参観・主体的交流	8	鷲澤 小林	①　学年間や担当者間で情報を共有することを大切にし、若手教員が相談しやすい環境を整え、児童への指導やさまざまな取組に生かす。 ②　授業研究を計画に沿って行うとともに、研究授業以外にも他学級の授業を参観する機会を自ら設け、授業力の向上を目指す。 ③　各部会で研究授業を実施し、自己選択・決定や振り返りが子どもの主体的な学びにつながっているかの情報共有を行い、自らの資質・能力の向上を図る。	①　学年間や担当者間で情報を共有し、よりよい学校づくりに向けた取組を考え、実践することができたか。 ②　授業研究を計画に沿って行い、授業力向上のため、他学級の授業を参観する機会を設けることができたか。 ③　各部会で研究授業を実施し、自己選択・決定や振り返りが子どもの主体的な学びにつながっているかの情報共有を行うことができたか。	教職員 ①３．４ ②３．２ ③２．６ ③２．９	①学年間や担当者間での情報交換は、日頃から行われている。さまざまな取組は、簡素化したり、別の内容に変更したりして実践することができた。 ②研究授業以外でも、他学級の授業を参観した先生は８８％いた。 ③振り返りや自己選択は実践できている。振り返りは、子どもたちの前向きな姿から、主体的な学びへとつながっていることを感じている。しかし、自己選択は、選択することが目的となってしまい、子どもの主体的な学びにつながっていることを感じることが実感しにくいのが現状である。 【参考数値】 ②参観回数 ・学期に２回以上‥８名、学期に１回…５名、年間に１～２回…２名、参観なし…２名 ③振り返り ・ほぼ毎時間…４名（国語、算数、理科、書写） 単元に数回…９名（国語、算数、社会、書写、体育） 単元末に１回…４名（国語、算数、理科）、未実施…１名	②研究授業以外でも学期に１回はパワーアップ参観週間を設けるなどの取組を実施していきたい。 ③振り返りは、教員一人一人が一教科を決めて毎時間実施して、主体的な学びにつなげていきたい。自己選択は、自己選択することが目的とならないように注意したい。振り返りも自己選択も、情報共有できるような時間を設け、教員が実践の有効性を感じ、さらなる充実した実践となるようにしていきたい。
○業務改善に向けた職場環境の整備	・さまざまな課題に対して協力し合える体制づくり ・業務の見直しと効率化 ・定時退校の推進	9	校長 前嶋	①　困っていることがあれば共有し、知恵を出し合って対応する。報告・連絡・相談を、学年間、担当者間等で確実に行い、共通理解の下、チームで事にあたる。 ②　必要な業務かどうか検討し、業務を見直し効率化を図る。 ③　基本月２回の定時退校日を設ける。「かえるボード」を利用し、退校時刻を意識して仕事をする。	①　報告・連絡・相談体制が機能し、チームで事にあたることができたか。 ②　業務の見直しと効率化を図ることができたか。 ③　定時退校日を実施することができたか。 ③　退校時刻を意識して仕事をすることができたか。	教職員 ①３．４ ①３．３ ③３．０	学年・学級、校務分掌で困ったことがあったときに相談できたという実感をもてた職員が昨年度の「３．６」、「３．７」から「３．４」と微減となった。また、報告、連絡、相談体制が機能しているかについても、昨年度の「３．５」から「３．３」へ微減となった。今年度は、教務・校務が担任業務を兼務していたため、チームで対応するための打ち合わせをする余裕がなかったことが要因ともいえる。 常勤の職員20名については全員、毎月の在校時間状況記録の提出ができた。月80時間以上の超過勤務は、４月５名・５月１名・６月３名・10月１名、月45時間以上の超過勤務は、４月８名・５月８名・６月８名・７月１名・８月０名・９月５名・10月７名・11月４名・12月４名・１月は２名。退校時刻を決める「かえるボード」はおおむね活用されてはいるが、決めた時刻に帰れていない職員も多い。	・年間の授業時数を見通し、行事前の準備の時間を確保する。 ・生徒指導面や個別の児童の支援等、担当者まかせにしないよう、情報共有と取組の方向性について検討する。管理職及びミドルリーダーの発信が重要である。 ・環境整備が業務の効率化を進めることにつながるので、職員作業日を設ける。 ・職員会議の要項（ＰＤＦ）をロイロノートに保管し、教室での指導に生かせるように合理化を図る。

学校関係者評価（その他の意見・改善策等）

＜学習面＞
・子ども自身が目標をもつと、家庭でもタブレット端末を活用するなどして自主学習に取り組める。

＜生活面＞
・自己有用感について、１～２年生と３～６年生との評価の差が気になる。特に４年生は、１～３年生がコロナ禍による活動制限のある３年間で多くの学校行事が中止となっていたため、学校生活の経験不足が影響しているのではないか。この経験不足をどのように補っていくかが今後の課題である。
・児童の防災・防犯意識が高くなっているのは、日常の指導が行き届いている結果が表れていてよい。
・部活動が地域移行されることにより、放課後の時間がスマートフォン・タブレット端末などメディア機器を使用する時間が多くなっている。体を動かすことが少なくなり、中学校での部活動についていけるか不安に感じている。

＜健やかな体＞
・元気アップカードに、子どもはがんばって取り組んでいる。

＜全般＞
・大きな事故がなく児童が学校生活を送ることができているのは、教職員の皆さまのおかげである。
・児童アンケートの評価ポイントが「３．０」以上が多いのは、よい学校生活を送ることができているからだと思う。
・大学で開かれた講義で、「親が教育に関心がない場合、家庭から子どもを離し地域に任せたほうがよい」という話を聞いた。地域で子ども達を見守ることは大切である。
・教職員アンケートの評価ポイントが下がっている項目が多い。
→少経験者の割合が増えていることが要因として考えられる。学校としてできるサポートを考えていきたい。
・卒業式の服装について、特に女子児童の袴着用の割合が高くなっている。一考の余地があるのではないか。